サイバーセキュリティ月間（２月１日～３月１８日）　サイバー攻撃等によるリスクは、年々深刻化しています。個人情報の流出、経済的な犯罪、インフラシステムの破壊などを防ぎましょう。

十島村教育委員会だより　平成 30 年 1 月号

さわやかトカラ情報

南北１６０㎞
「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒 892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL　099-227-9771

１月・・・新成人を祝う会

十島村教育長　有村孝一

１月８日は成人の日でした。43 市町村でこの日に成人を祝う会を実施するのは、十島村だけです。他の市町村は、正月にしたりするところが多いようです。

今年の新成人は５名でした。その全員が参加して「新成人を祝う会」が開催されました。

参加したのは、口之島に山海留学をしていた大隈翔太さんが大分市から、諏訪之瀬島に山海留学をしていた小櫻斉生さんが福岡市から、志方悠希さんが東京都から、悪石島出身の坂元里帆さんが福岡市から、小宝島出身の小林莉衣奈さんが東京都からです。

式典では、肥後正司村長が、「食べ物にも旬があるように、人生にも何かを行うに最適の時期があります。まさに皆さんにとって今が旬ではないでしょうか。今しかできないことを逃さず精一杯取り組んでください。」また、「失敗しても、何度でも挑戦する強靭な精神力を持つ人になってください。苦しい峠にも、必ず明るい明日があります。」と式辞を述べられました。

これに対して新成人からは、次のような抱負が述べられました。

大隈翔太さんは、「成人は人生の通過点である。今後行動の幅も広がり、責任も増す。今日を境に未熟ではあるが頑張りたい。そして、大学で学んでいるエネルギー開発について頑張っていきたい。」

小櫻斉生さんは、「諏訪之瀬島を卒業後いろいろ経験してきた。人生は成長することだ。プロの音響エンジニアになる夢があるので、諏訪之瀬島にお世話になった恩返しをしたい。いつか、自分の技術でイベントをしてみたい。」

志方悠希さんは、「就職して２年、今はとても楽しい。辛い時には、諏訪之瀬島で培ったことを生かしている。現在の職場では、大人として扱われている。これから一歩づつ成長することが恩返しになる。」

坂元里帆さんは、「春から社会人になるので、自分を信じてがんばる。成人になったので、一人前の大人として認めてもらえるように努める。」

小林莉衣奈さんは、「成人になった今、島で過ごしたいろいろな事が思い出されて、感謝の気持ちでいっぱいだ。逆境の時こそ笑っていられるようにしたい。このことを実践すると大人と言えるのではないかと思う。将来は、スクールカウンセラーとなり、いただいた恩を返せるように頑張っていきたい。」

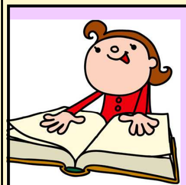
５人ともすごく自覚して、よく考えていると思いました。

参加した保護者、恩師、トカラふるさと会の方々は、目の前の新成人の頼もしい姿に触れ、新成人の前途を期待する温かい眼差しで見守っていらっしゃいました。

語らいの時間はあっという間に過ぎてしまいました。将来この５人が、十島村で活躍する日が来ることを願っています。

シリーズ――新聞に投稿１「若い目」
（１２月１６日掲載）悪石島小6年　久永ひかり

書評合戦で作戦大成功



「ピ、ピ、ピ、ピー」。スタートの音が心の中にひびきわたった。胸がドキドキときん張していたのは、ビブリオバトルが行われたからだ。ビブリオバトルとは、1人一冊好きな本を紹介し、どの本を一番読みたくなったかを会場の投票で決める、激しいバトルだ。時間は3分。この時間で、どう伝えるか考え、工夫しながら、当日を待った。

相手は3人で、私は一番最後だった。きん張で思わず肩が上がる。早口で、頬がみるみる赤くなっていくのが自分でも分かった。残り40秒。ついに私は勝負に出た。突然クイズを出題し、会場を一気に本の世界へ引き込んだ。島民を見ると笑ってくれて、シーンと静まりかえった会場が、きらきらと輝く太陽のように明るくなった。

終わりのベルがなり、いよいよ結果発表。結果は、半数近くの人が私に投票してくれた。「おめでとう」とあたたかいはく手をもらい、賞状を持った私の心の中はピースサインに変わっていた。

シリーズ――新聞に投稿２「若い目」
（１２月２１日掲載）小宝島小１年　いわした　はやと

はじめてケーキたべた

きょう、きゅうしょくでケーキをたべました。うまれてはじめてです。それは、こむぎのケーキは、ぼくのからだにだめだからです。

はこからでてきたケーキは、しかくなかたちです。すごくいいにおいです。いろはちゃいろのクリームです。とってもあまかったです。すこしずつ、ぜんぶたべました。ふしぎなくらい、おいしかったです。

ぼくのたべられる、おこめでできたケーキをおくってくれた、かごしまのきゅうしょくのせんせい、ありがとう。とってもうれしかったです。

シリーズ――新聞に投稿３「若い目」
（１２月２４日掲載）　宝島小6年　寺田　碧海

成功より成長を

体育の時間に自分たちが学習した、走り高跳びの動画を見ました。自分がどのように動いているのかを見たことがないので「上手に跳べているかな」と少しどきどきしました。

動画は、初めて学習した1時間目と、最後の発表会の様子を映したものでした。みんな跳ぶリズムや跳び方がはじめの頃と変わって、上手になっていました。わたしも１ﾒｰﾄﾙ15ｾﾝﾁを跳べそうだったので、見ていて悔しくなりました。

すると先生が「一生懸命に努力をしても、成功することもあれば失敗することもある。一生懸命に努力した分、必ず成長しているはずだ。だから成功より成長にこだわろう」と話しました。

成功できなくて悔しかった気持ちがすっと抜けて、成長できた自分をほめてあげたい気分になりました。次のバスケットボールの学習では、たくさん汗をかくくらい練習して成功もしたいです。

シリーズ――新聞に投稿４　ひろば　プラス
（１２月２４日掲載）諏訪之瀬島中3年　山中　雪嘉

家族　大切な祖父　恩返しする

この世には、たくさんの「恐怖」がある。私もさまざまなことに恐怖を感じるが、中でも「祖父母の死」を最も恐怖と感じた。

学校帰りに母から聞いた祖母の死。眠い目をこすりながら会いに行った祖父との最期。朝起きて受け入れることのできなかった祖母の死。私はすごく後悔した。私の要望に何でも応えてくれた祖父母に、何もしてあげられなかったからだ。

祖父母の映ったＤＶＤや買ってくれた物を見るたびに、もっとこうすれば良かった、と後悔する。でも、このまま後悔していても、亡くなった祖父母は戻ってこない。だから私は、後悔しないためにも、一人だけの祖父をもっと大切にすることにした。

祖父とは長期休みにしか会えない。その少ない間に、私のために何でもしてくれる祖父のために私ができる恩返しを、あと１週間で見つけたい。

シリーズ――新聞に投稿５「若い目」
（１２月２６日掲載）　口之島小5年　松田　紘明

宇宙君ありがとう

ぼくには２人の兄がいる。１人は鹿児島に住んでいる。そしてもう１人は宇宙君だ。ぼくは４月から山海留学で口之島にきている。宇宙君は口之島のお兄ちゃんだ。

宇宙君と一緒にいるととても心強い。口之島に来てから、先生や友達に大きい声であいさつができるようになった。前の学校では、休み時間にあんまりしゃべることがなかったけど、こっちに来てからは休み時間にも話をするようになった。鹿児島では真っ暗な道を歩くのがこわかったけど、今はそれも全然へっちゃらになった。家の中で、悪ふざけで野球やサッカーのまねごとをするときもあり、とても楽しい。

宇宙君は勉強を教えるのも上手だ。難しい問題があってどうしても解けなかったとき、５年生のときに使っていたノートを見せて説明をしてくれた。

島に来て、ぼくは変わったと思う。いろんなことが楽しいし、勉強もできるようになった。そう思えるようになったのも、学校でも家でもいつも一緒にいる宇宙君の存在はとても大きい。ぼくも宇宙君みたいに、みんなを助けてあげられるような、たのもしい存在になりたい。宇宙君ありがとう。

シリーズ――新聞に投稿６「若い目」
（１２月２７日掲載）　小宝島中1年　岩下　孟司

母と会える冬休み

冬休み前、夜９時頃に父のもとに母から無料通信アプリＬＩＮＥ（ライン）のメッセージが来ました。テストの採点をしていたようです。かなり大変そうでした。一緒に送られてきた絵柄「スタンプ」の主人公の、テストのプリントに向かう姿に、母の気持ちを感じました。

母は鹿児島で仕事をしています。だから、普段は父と小学３年生の弟、来年春に小学１年生になる妹と暮らしています。ご飯つくりと茶わん洗いは父が、掃除は僕がします。父が洗濯し、干したりたたんだりするのは僕と弟です。

大変なのは弟の宿題を見ることです。作文は特に大変です。僕も苦手だからです。いろんな意味で「母がいたらなあ」と思います。そして、母のありがたみを感じます。

冬休みには、しばらくぶりに母に会えます。父も弟も妹も一緒です。母と話すことは特に考えていません。ただ会えればいいです。

南日本新聞掲載「子供の歌（11/25）」

将来の夢
悪石島小６年　久永ひかり

この１冊から見つけた
のはキセキ
厚くて重いお仕事図鑑
パッと開いて二・三枚
めくる
するとピタッとページ
が止まる
体が氷でかたまったよ
うに
静かに動けなくなった
「理学療法士」
きっと十年後にはみん
なの氷を
私がとかしてあげたい
それが私の夢

小宝島中学校からのメッセージ

教諭　永山　大祐

海に囲まれた島では，豊かな自然の中で様々な貴重な体験をすることができる。それ自体，本当にすばらしいことである。しかし一方で，同じ中学生の中には，学習塾に通えたり，部活動で汗を流したりしている生徒がいるのも現実である。島の子どもたちは，中学卒業と同時に島を離れ，そういった子どもたちといっしょに高校生活を送ることになる。「郷に入っては郷に従え」という諺があるように，島を離れた途端，やりにくさを感じる場面が訪れるかもしれない。純朴な子どもたちにとっては，ときには大きな試練にもなるであろう。『１５の島立ち』に向けて教師や周りの大人に頼らずに一人で，あるいは自分たちでできる経験を積ませたい。

～私からのメッセージ～

地域の皆様から様々なことを教えていただくように，教師として子どもたちにたくさんのことを伝えることで，子どもたちの『１５の島立ち』を応援していきましょう。